

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2021年3月1日

文責：JUN

コロナ禍が「学び合う学び」にもたらしたものの

コロナ禍で揺れた一年も、ようやく終わりを迎えます。大変な一年でした。苦難の一年でした。何が大変だったか、それを言い出せばきりが無いほどあるのではないのでしょうか。

そんななか、私が注目しているのが、「学び合う学び」がどうなっているかということです。令和3年度は確実に、令和2年度から本格的実践に入るはずだった「主体的・対話的で深い学び」の仕切り直しになるからです。

そこで、緊急事態宣言が一部解除になる3月の今、「学び合う学び」がどういう状況になっているか、考えてみることにします。

1 これまでの取組の違いが、今の状態なのは？

感染しない、感染させない、それには、まずは飛沫感染を防ぐマスク着用が不可欠。このことは全国一律に見事なまでに実行されました。手洗い、うがい、換気も厳密に実行されているのではないのでしょうか。そこまでは、多少の差はあれ、すべての学校で行われているし、すべて大切なことでした。

ただ、子どもの学びに向き合う教師をもっとも苦しめたのは、「ソーシャル・ディスタンス」（「ソーシャル」は社会的という意味ですが、実際には体と体の距離をとるとという意味の「フィジカル」と言ったほうがよいとも言われています）です。そのための対策として示された「前後左右の間隔をできるだけ開けて、全員一律に前を向ける机の並べ方」が、「学び合う学び」を大切にする教師たちを苦しめました。そして、それは「主体的・対話的で深い学び」に取り組まなければいけない全国の学校の取組を委縮させました。

私は、ある程度詳細なことは、自分がかかわっている学校の状況しか知りません。それはすべて「学び合う学び」に取り組む学校です。それらの学校ですら、大きな影響を受けました。ということは、「学び合う学び」のような取組をしていなかった学校は、ほとんど、本当の意味での「主体的・対話的で深い学び」は実践されなかったということになるのではないのでしょうか。

これは、私がかかわっている学校がそうだという意味ではありません。私が訪問していない学校のこと、関係しているさまざまな人からの情報が入るので、それらを総合して感じたことです。それは、「協同的学び」に取り組んでいたけれど、この一年で実践できなくなり、児童生徒の学ぶ状態が変わってしまったという学校と、以前のようにはできなかったけれど、児童生徒の学びへの姿勢は維持できているという学校に分かれたということです。

何が違うからそうなったのでしょうか。もちろん、その原因は一つではないでしょう。その学校ならではの事情もあるにちがいません。ですから、一律にこうだと決めるわけにはいきません。た

だ、私は、ある面からだけは、これを機会にしっかり見つめておいたほうがよいと感じています。それは、コロナ禍以前における「協同的学び」すなわち「学び合う学び」ですが、その理念と趣旨に対する理解がどれほどのものであったかということです。

もし、コロナ禍で一気に崩れた学校があったとしたら、だれもが考えるのは、コロナ禍以前の行っていた授業が「形」をつくる域で終わっていたのではないかということです。子どもをグループにすることによって、それまでにはない状況が生まれたのだけれど、取組はそこまでそこから先に進んでいなかったということなのではないかということです。

子どもは、グループになることによって、必然的につながりをつくろうとします。かかわりができるようになれば、学習の場ですから、学びのやり取りは生れます。それだけで、一斉指導型授業にはないものが生まれます。それで、「ああ、『学び合う学び』とはこういうことなのだ」とわかったような気持ちになり、そこで留まってしまった、そういうことではないかと思うのです。

この子どもの変化は、グループになった、仲間とつながれた、ということだけで生まれたものです。そこから先の学びにかかわる教師の授業の深まりはあまりなかったかもしれません。だとすると、その「グループにする」ということができなくなったとき、何かが変わってしまったのです。授業のときの座席をグループにする、それだけの域で留まっていたとしたら、コロナ禍で子どもの状況が変わるのは必然的だと思われます。

コロナ禍で子どもの状態が崩れなかった学校の教師が、先日こんなことを言っていました。「私は、一気に崩れてしまうかもしれないと心配していました。でも、崩れませんでした。できないならできないなりに、子どもたちがうまくチャンスを作って学び合っていたのです。2年間の取組で生まれたものが子どもの体に沁み込んでいたのですね」と。

もちろん、これは、一つの学級のことを言っているわけではありません。学校全体がこうだったと言っているのです。子どもの体と心に、「学び合う学び」における学び合い方と、学び合う心地よさと、学び合う学びで培われる学びの喜びが存在していれば、困難さを乗り越えて、できる限りのかかわりをして学ぼうとする、そういうことなのです。

それは、子どもよりも前に、その学校の教師たちに「学び合う学び」の大切さと目指すもの、そのために壊してはいけないものは何で、実現しなければいけないものは何かが保ち続けられていて、どの子どもも「学び合う学び」によって意欲的になっていくことがうれしくてならない、そういう教師としての喜びを抱いていた、その表れだと言ってよいでしょう。

コロナ禍は、その違いを、はっきりと示したのです。

令和2年度を終えるに当たり、現在の子どもの状態を、全教師で冷静にしっかり観察し、自分の学校はどちらの部類に強く傾斜しているか、そう考えることです。

あわてて子どもを叱ったり、こうしろと規制したりしてもだめです。すべては、自分たち教師のあり方によってそうなったことなのですから、自分たちの学校の状況を冷静に見極めることです。もちろん、自分の学校の現状を知って落胆したり、嘆いたりすることになるかもしれませんが、でも、すべては今の事実を受け入れることからしか何も生まれないのです。

コロナ禍だった、これ以上落ちることはない、だからここからどれだけでも上昇させることができる、そう考えることです。逆に、状態を維持できていた学校は、何かできていたからそうなったのか、しっかり確認して心に刻むことです。

2 改革に必要なのは、原点の把握と先の見通し

私は、よりよいものを創り出すときに、大切だと思うことが二つあると思っています。いつのときも、困難なことに立ち向かうときは、この二つを心の中で反芻し、それはいったいどういうことなのかと具体的に考えるようにしていました。

その一つは「原点」です。「学び合う学び」で言えば、なぜ、自分たちは「学び合う学び」を目指すのかということです。それがなければ、本気で取り組めるわけがないのですから。

その前に「学び合う学び」ってどういうものですか、と尋ねてくる教師がいます。「学び合い」に対する考え方がいろいろあって、統一できなくて困っていると吐露された方もいます。気持ちはわかりますが、それが完全に理解でき、教師の考え方が完全に一致するなどということはなりえないことだと悟ることで。そうではなく「学び合う学び」の大切さをじっくり共通理解することです。教師ならだれもが、他者とつながること、支え合うことでよりよく生きられるということは当たり前であり、大事にしなければならないという思いは抱いています。それは教育の方法ではなく、生きる哲学のようなことです。教育の方法を統一しようとするから、共通理解が得られなくなるのです。

そして、「学び合う学び」の語尾の「学び」が「授業」ではないということの意味を考えてもらうとよいでしょう。そこには「教える授業」「教師の巧みな授業」ということではなく、「子どもの学び」が生まれることを大事にするという意味があるのだとわかり合うことです。これも人生の哲学です。学ぶのは子どもです。その子どもがどう学ぶか、教え方ということはもちろんあるけれど、それよりも、大切なのは、子どもの学びのことなのだ共通理解することです。

これが「原点」です。

これまでの校内研修というと、教科を無理やり統一し、指導方法も一つに決め、学習指導案の形式も定め、何もかも枠にはめてやっていました。その研究が長続きしないことはみんな知っているのです。けれども、何かに寄りかかることの安心感もあったのでしょうし、個性的な行いよりも全体に合わせることを大事にするというこれまでの価値観があり、こういう研究方法から脱却できなかったのです。

「学び合う学び」への取組は、その名称が示すとおり、子どもが学び合いによって自らの学びを深めることを目指すものです。ということは、授業づくりを行う教師の「視線」は、「子どもの学び」に向けられていなければなりません。子どもの学びがどうなっているか、それを見つめ捉えることからすべてを始めなければなりません。それは、「教師の指導法」を研究したこれまでの授業研究と一線を画すものです。

それが「原点」です。この「原点」を持つことがなんとしても必要です。「授業」ではなく「学び」、「勉強」という言い方は論外ですが、「学習」ではなく「学び」だということがとても大切です。

もちろん、授業において教師の指導のあり方を考えることが不必要だというわけではありません。しかし、その教師の指導法が、子どもの学びを見つめないままなされれば、それは子どもの事実と乖離してしまいます。教師は、教材研究はどれだけでも深く行うべきです。それは底なしです。その量と質には大きな価値があります。しかし、どう授業するかは、子どもの事実在即さない限り有効なものにはなりません。学ぶのは子どもなのですから。

「原点」を共通理解する、そして、ことあることあるごとに「原点」がどういうものであったか、確かめ合う、これが一つ目に大切なことです。

そして、二つ目に大切なことは「先への見通し」です。

どんなことでもそうですが、人が何かを成すときには、今がしっかり見えていなければなりません。今、自分は何をどうしているのか、そして、自分のやっていることは、今、どういう状況か、それを見ようとしないと、周りが見えず、状況がわからず、自分だけ浮き上がってしまいます。授業という行為は、子どもと息を合わせて行わない限りよりよいものにならないのですから、教師に、今が見えていないということは致命傷になります。

しかし、自分の今を見るということは、言葉ほど簡単なことではありません。

本当に見える人は、自分をもう一つの目で俯瞰していると言います。心理学で言われるメタ認識というものでしょうか。本当にそういう認識力をもとうと思えば、なかなか大変だと思いますが、少しでもそういう見方をしてみようと努力することはできます。

「自分の今を見る」ためには、まず、今、おこなっていることに自信とまでいかななくても、できる限りのことはしたという思いがなければなりません。授業であれば、教材研究を尽くし、子どもについてもしっかり考えてきたという自分へのある程度の納得感です。その思いがあると、学ぶ子どものことを見る余裕が生まれるのです。その余裕がなく無我夢中になったら、今の自分を別の目から見るなどということができるはずがありません。

もう一つ大切なこと、それが「今」の向こうにある「先の見通し」をもつことです。

物事は、どんなことでも、先につながっています。「今」の状況は、必ず「先」につながっています。ということは、この「今」の状況が、これから先にどうなるか、それが見えていないと、今に対する手が打てなくなります。

もちろん、これから先ということは、教師である自分が学ばせたいことだけの「先」ではありません。子どもの学びの「先」もあります。子どもの学びの「先」は一つではなく、複数見えるはずですが、それをどうしていくのか、いくつかに絞るのか、しばらく複数のままでよいのか、別の角度から考えさせるか、そういった判断が教師に求められます。しかも、それは瞬間的判断です。その判断で、子どもの学びはがらっと様相を変えます。それができるかどうかは、まさに、教師に「先の見通し」があるのかどうかなのです。

この「先の見通し」は、常日頃から、何事に対してもそういう目で見ると心に心がけることが大切です。そうしなければできないことではありません。頭の使い方が、そういう思考回路になるようにするのは、もちろん、それは、一朝一夕で身につくものではありません。長いスパンで、少しずつ磨いていくしかないのです。平生養生です。

学校で同僚と行う校内研修は、まさに、それを磨き合う場なのです。「子どもの今」「学びの今」を見ることができるようになるため、子どもの事実を出し合うのです。その「今」から学びの深まりをどう目指すかを考えることで「先の見通し」とはどのようなものなのかを知り、その大切さを感じとるのです。決して、指導法を研修することでも、やり方を揃えることでもありません。

一年の終わり、学校の「今」、自分の「今」をよく見つめ、「原点」を再確認することによって、次年度に向けて歩み出してもらいたい、それがみなさんへの私のエールです。